



---

## 2010 年度（第 6 回）こども環境学会賞の発表

---

2011 年 3 月 15 日

デザイン賞選考委員長 仙田 満

論文著作賞選考委員長 織田正昭

活動賞選考委員長 小澤紀美子

2010 年 7 月より公募致しましたこども環境学会の学会賞につきましては、2010 年 11 月末までに論文賞 12 件、デザイン賞 7 件、活動賞 10 件、合計 29 件のご応募をいただきました。

選考委員による厳正な審査の結果、論文著作賞なし、論文著作奨励賞 2 件、デザイン賞 1 件、デザイン奨励賞 3 件、活動賞 1 件、活動奨励賞 4 件、合計 11 件が選定されました。

受賞者および講評は以下の通りです。（各賞ごと、応募者の 50 音順）

### こども環境学会 論文・著作賞

論文・著作賞

該当者なし

論文・著作奨励賞

安部芳絵（早稲田大学文化構想学部）

「子ども支援学研究の視座」

千代章一郎（広島大学大学院）

「小学生児童による生活環境に関する地図描写の変化」

### こども環境学会 デザイン賞

デザイン賞

松村正希（莫設計同人）

「きょうだい保育と、子どもたちの生きる力を引き出す家（おうち）」

## デザイン奨励賞

加茂紀和子、曾我部昌史、竹内昌義、マニユエル・ダルディッツ、小野田泰明

(みかんぐみ)

「伊那東小学校」

手塚貴晴+手塚由比(手塚建築研究所)、堀内紀子+MacAdam Charles、

今川憲英、今川聖英

「ネットの森」

遠野未来(遠野未来建築事務所)

「つぼみとそらまめ・・・左官によるこども空間の可能性」

## こども環境学会 活動賞

### 活動賞

鈴木賢一、岡庭純子、名古屋市立大学学生(名古屋市立大学大学院芸術工学研究科)

「病院における子どものための療養環境整備活動」

### 活動奨励賞

佐藤哲信(日本公開庭園機構)

「市民による通学路安全緑地づくり活動」

松平千佳(静岡県立大学短期大学部)

「小児医療におけるホスピタル・プレイ活動について」

三輪律江(ミニシティプラス)

「こどもたちがまちを創る～ミニヨコハマシティの活動」

米倉雅真(こども未来フォーラム)

「子ども未来フォーラム：子どもの遊び環境をつくる活動」

以上が受賞されたものですが、選考に漏れた方々におかれましても受賞者に劣らないすぐれた学術活動や実践活動であることを申し添えますとともに、さらに一層の活躍を祈念いたします。また更に多くの会員の皆様が次回の学会賞に応募されますことを期待いたします。

## 各賞の対象と審査委員

### (1) こども環境論文・著作賞

近年中に完成し発表された研究論文および著作出版物であって、こども環境学の進歩に寄与する優れたもの。

選考委員：織田正昭（委員長）

- 委員長 織田 正昭（東京大学・国際保健／発達医科学）
- （委員）飯島 純夫（山梨大学医学部・公衆衛生／看護）
- （同）清水 将之（関西国際学・児童精神医学）
- （同）住田 正樹（放送大学・発達社会学）
- （同）仙田 満（放送大学・環境建築学）
- （同）高橋 鷹志（東大名誉教授・建築）
- （同）高橋 勝（横浜国立大学・教育人間学）
- （同）寺本 潔（愛知教育大学・社会科教育）
- （同）夏秋 英房（國學院大学・児童学）
- （同）福岡 孝純（帝京大学・スポーツ環境）
- （同）矢田 努（愛知産業大学・建築）

### (2) こども環境デザイン賞

近年中にデザインされた環境作品（建築・ランドスケープ・インテリア・遊具・家具・グラフィックその他）であり、こども環境学的見地からも高い水準が認められる独創的なもので、子どもの成育に資することが認められるすぐれた環境デザイン。

選考委員：

- 委員長 仙田 満（放送大学・環境建築学）
- （委員）石井 賢俊（NIDOインダストリアルデザイン・プロダクトデザイン）
- （同）及部 克人（武蔵野美術大学名誉教授・視覚伝達デザイン）
- （同）定行 まり子（日本女子大学・住居学）
- （同）千代 章一郎（広島大学・建築史学）
- （同）福岡 孝純（帝京大学・スポーツ環境）
- （同）松本 直司（名古屋工業大学・建築計画学）

### (3) こども環境活動賞

こども環境に寄与する、上記以外の活動（施設運営・行政施策・社会活動・その他）であって、近年中に完成した業績および継続的な活動によってその成果が認められた活動。

選考委員：

- 委員長 小澤紀美子（東海大学・環境教育）
- （委員）井上美智子（大阪大谷大学・幼児教育）
- （同）神谷 明宏（聖徳大学・児童学）
- （同）岸 裕司（学校と地域の融合教育研究会）
- （同）木下 勇（千葉大学・まちづくり）
- （同）木村 歩美（篠原学園専門学校・幼児教育）
- （同）黒岩佐和子（児童支援活動）

## こども環境学会 論文・著作賞

### <総評>

第4回論文著作賞は、応募12点について11名の審査委員全員が約2カ月にわたって査読し、それらをコメント付き評点をもとに評価し、さらに審査委員会での議論を経て決定したものである。その結果、最終的に原著論文6点、著書1点が二次審査に付され、委員会でのさらなる討論をもとに最終的に、本賞該当なし、奨励賞2点を選出された。近年の応募が著書・著作にやや偏りがちであったことから、今回、原著論文の応募が多かったことは喜ばしいことである。個々の奨励賞受賞作品の講評は指定審査委員に委ねるが、今後の応募条件を明確化すべく、公表されていない学位論文そのものの応募は避けていただくこと、応募は日本語または英語で書かれたものであること、同一年度に同じ学会員が同一分野への応募は1点に限ること、などが審査会で改めて確認された。応募作品はいずれもかなりの力作であり、審査委員の頭を悩ましたが、やはりこども環境という視点が見えるもの、研究目的が明確であり、それに対応する結果が明示されているもの、論文書式として整っているもの、に高評価が与えられた。本賞は当学会の学術レベルの指標の一つになるものであるが、今後のこども環境学の教育・啓蒙に高く寄与するものも顕彰対象になる。会員各位におかれては、研究レベルのみから判断して応募をためらうのではなく、積極的に本賞に応募していただきたい。本賞受賞作は研究レベルを反映するが、応募数が多いことはまた学会の学術活動の活発さの指標になるからである。

(論文著作賞審査委員長 織田 正昭)

### 論文・著作賞

該当者なし

### 論文・著作奨励賞

安部芳絵 (早稲田大学文化構想学部)

#### 「子ども支援学研究の視座」

本作品(著書)は、こども支援学構築への試みとして、こども参加支援研究を理論・実践・制度の面から重層的に検討したものである。理論の構造を分析し支援者の専門性と役割を論じる理論編では、こどもの権利条約を下敷きに、乳幼児期のこども参加の意義・目的、社会教育におけるこども・若者の社会参加論・地域福祉論、エンパワーメント論等について内外の文献を整理し詳細に論じている。実践編では、事例の省察的分析をもとに社会に開かれた実践知のあり方と課題を提示し、力作として高い評価を得て奨励賞に推された。参考文献も多く、参加支援論の良いテキストとして活用していただけるであろう。こどもの権利保障には実践を支える制度構築が求められるが、書籍化にあたっての詳細な議論割愛が惜しまれる。こども環境学研究の重要な一領域をなす参加に関する研究として、こども参加それ自体の目的や意義とともに、家庭、学校、社会が置かれている現実の状況を踏まえた物的、人的サポートとその再配置の構想、スペシャリストとしてのこども参加支援者の社会的位置づけなどの確立にむけ、一層の展開を期待したい。

(矢田努)

### 論文・著作奨励賞

千代章一郎 (広島大学大学院)

#### 「小学生児童による生活環境に関する地図描写の変化」

本論文の視点は、こども環境を考えるうえで興味深いものである。被験者は少ないものの、小学4年生から6年生までの者が描画した自宅の空間配置を手がかりに、学年が上がるにつれて、その空間配置

がどのように変化するかを考察した研究である。論文の構成や論旨の展開は適切であるが、やや記述的であり、データの定量的解析もほしかった。「公共的、私的な空間」、居住形態や通学経路による類別、「楽しい、楽しくない」という児童の嗜好性の把握、「開く、閉じる」という用語法、公立小学校の児童を対象とした分析など、今後の進展が待たれる。しかし、高層マンションに住み、遠距離通学をする附属小学校の児童は、外の世界への関心度が低くなるのが指摘されるなど、興味深い話題が提供されている。全体的にバランスが取れているよい論文なので、奨励賞に値すると判断した。

(福岡孝純)

## こども環境学会 デザイン賞

### <総評>

こども環境学会デザイン賞は子どもの視点に立つ建築、造園、遊具、プロダクト、絵本、グラフィックス等さまざまなデザイン領域の総合的な評価より優秀なるデザイン作品を表彰するものである。第6回である本年度は7点の応募があった。遊びを創出する遊具、子どもの視点に立った保育園や園庭づくり、新しい学校空間など多様なデザインが応募された。

第1段階の審査で現地審査作品5点を選定し、担当の審査員が現地審査やヒアリングを行い、最終的に本年のデザイン賞として1点と奨励賞3点を決定した。

本年もデザインレベルが高く、少数激戦となったが、良い作品を表彰することができたと思われる。こども環境学会デザイン賞は建築、ID、造園、スポーツ科学、子ども文化等、専門領域の異なる審査員による多様な評価のもとに決められた。その点で受賞作品は多面的な高い評価が得られた作品といえる。受賞者の今後のますますの活躍を期待したい。またすべての応募者のご努力に感謝し、再び本賞に挑戦していただきますようお願いしたい。

(デザイン賞選考委員長 仙田満)

### デザイン賞

松村正希 (莫設計同人)

#### 「きょうだい保育と、子どもたちの生きる力を引き出す家(おうち)」

滋賀のきたの保育園は、緑豊かなところで京都・大阪への通勤圏にある。産休明け保育、夜7時までの延長保育、障害児保育、一時保育のほか子育て支援センターも行っている。開園して2011年に8年になる。開園当初から1~5歳児約25人ほどをひとつの家族とする「保育室=家(おうち)」と遊戯室、屋外テラスによって構成されている。『おうち』は、調理人と保育者がふたりで担当する。

平面計画は、0歳児用、1~5歳児約25名=1家族(異年齢集団)用の『保育室=家(おうち)』と遊戯室、屋外テラスによって構成されている。各「おうち」は玄関、対面式キッチン付の台所、食道、居間、寝室、トイレ、浴室(シャワー室)を有する平面構成(日本家屋の伝統的な『田の字型』)となっており、子どもたちが生活するのに必要な機能が家と同じようにそろっている。

園長さんから、異年齢集団による保育を『きょうだい保育』と呼ぶのだと教えられた。『1歳児を含めた異年齢の日々の生活は、人が育つ当たり前の普通の環境であり、その環境のなかで「人としての育ち」を育てている子どもたちです。見たり真似たり、頼ったり頼られたり、憧れたり、憧れられたり、甘えたり、甘えられたり、叱ったり、叱られたり、たくさんの人を思う気持ちがあふれている異年齢の生活です。』と語り継いだ。

まずは、子どもたちを見ることになった。大きな屋根の下にゆとりのある三つの保育室とひとつの乳児保育室がある、ひとつの保育室は121㎡、遊戯室や事務所、厨房、交流室、テラスなどを合計すると約800㎡ ほどもある。

ちょうど昼食を準備しているところだった。トイレとの大ガラス窓からの見通すと調理をしている調理師のまわりに子どもたちが集まっており、低い机に座っている1歳児のテーブルに両手でお椀を大切に持って配膳している子どもがいる。と園長さんが『あの子は2歳です』と。思いが

けない光景に驚き注視していると3人程の座っている1歳児に配膳がおわると、前掛けをはずして、調理人のそばにいきほっとしたように寄り添う。子どもは、緊張しているのだ。やさしく声がけをされて笑顔をみせる。

全員が昼食を食べ始めた。大きい子が小さい子におかずをわけている。小さい子の食事を手伝っている。園長さんの話されていた言葉の意味が初めて理解できた。私の孫が2歳と5ヶ月、両親が働いており、終日保育施設で過ごしている。会うたびに言葉を覚え成長著しいが、配膳をする姿など想像することもできなかった。

『家族を意識した保育空間のなかでの子どもたちの生活と発達を深く考え、保育方針のひとつとして、生きていくために最も大切な「食環境の充実」を掲げている。』

ここでは、設計者がこのような『きょうだい保育』を提案したのだという。空間の配置が保育のありかたに合わせて構成されている。しかし、これを引き受けた園長さんや調理師や保育者の保育のありかたにたいする考え方が、共有されるまでに多くの試行錯誤がかさねられた違いない。ゆとりのある空間のなかにこそ、独自の保育のありかたが育つのだということが短い時間の見学者にもまっすぐ伝わる成果が見てとれた。

(及部克人)

## デザイン奨励賞

加茂紀和子、曾我部昌史、竹内昌義、マニユエル・ダルディッツ、小野田泰明(みかんぐみ)

### 「伊那東小学校」

住民の要望で保存されたコヒガン桜の巨樹は、新校舎に設けられた広場の中心に座し、小学校の象徴となっている。建物は東の山脈を望むように南北に伸び、塀のない校庭は周辺地区に開放され、遠方の山々まで広がっている。新校舎は、旧校舎を壊す前に建設したと言う。校庭が十分な広さを確保できたことと、残された旧校舎とを結ぶ長い渡り廊下の設置がこれを可能にしたのだろう。幅が広くやや下っている渡り廊下は、左右が全面ガラス張りで、西の学級菜園と東の校庭を視覚的につないでいる。この建物特徴は、空間の時間的・物理的・心理的な連続性のようだ。1年生の教室の間に設けられた中庭は、上履きそのまま利用できる。2階の天井は高く緩やかに傾斜し、そこから白く軽快なたれ壁が格子状に広がっている。2階の共用スペースから教室にいたる空間は、くねくねと見え隠れしながら次の空間へとつながっている。教室の入口のまるで取り次の間のような小部屋、1階の教室と校庭との間の土間など、隣接空間との多様な連続をもたらず仕掛けが、豊かな空間を構成している。ただ、渡り廊下を見通せるようになっている職員室の開放的なガラス面が、貼り紙でふさがれてしまっているなど、建築とその利用との間に違和感があったのが残念なところである。

(松本直司)

## デザイン奨励賞

手塚貴晴+手塚由比(手塚建築研究所)、堀内紀子+MacAdam Charles、今川憲英、今川聖英

### 「ネットの森」

彫刻の森、ネットの森は造形作家 堀内紀子氏と建築家 手塚貴晴・由比氏の協同作品である。堀内氏は、私の知る限り沖縄の海洋博で造園家の高野文彰氏と協同で素晴らしいこどものためのあそび場をつくられた。その後、多くの場所で美しいネット造形と、その中での子どものあそびの展開がみられた。彫刻の森に堀内氏のネットが最初に置かれたのは1986年のことだ。堀内紀子氏の造形作品としての評価は高く定まっている。今回はどちらかといえば建築家手塚氏が堀内氏のネットとどのように取り組み、新たな展開をしていくかという点に強い興味をもった。集成材の角柱を横に積み重ねた造形はおもしろく、外部の彫刻の森といきづく関係はとても良いと思う。しかし角

材は子どもにとって登り、くぐり、探索する素材でもある。それが禁止されていることにきわめて残念な感じがした。フレーム自体が子ども達のあそび場となるような構成を期待したのだが、実際にはネットだけの魅力になってしまっている。すなわち堀内氏の世界だけに留まっている。それはそれで素晴らしいのだが、すでに評価が定まったものであり、今回はやはりそれとの新たな挑戦を期待したところがある。全体としては高いレベルの環境デザイン作品といえるのだが、私たちの期待はもっとそれ以上だったと言う点から、奨励賞としている。

(仙田満)

## デザイン奨励賞

遠野未来 (遠野未来建築事務所)

### 「つぼみとそらまめ・・・左官によるこども空間の可能性」

矢向つぼみ保育園は横浜市にあるビル1階を改装した約50坪の保育園である。0, 1, 2歳児32人の園児構成でこども4人に一人の保育士がつく。地域とのかかわりを深めるために窓ガラス越しに街ゆく人とこどもたちの交流ができるような工夫がなされている。園内は壁、天井を、呼吸する自然素材であるしっくい仕上げで緩やかな曲面を描き、床をサワラ材として作者遠野氏が「いのちをつなぐ巣」と呼ぶ胎内を思わせるような安心感と温もりがある空間表現となっている。当園手作りの低い移動式のパーテーションで多様なテリトリーをつくり、ヒノキ材の室内遊具をきめ細かく配置して各年代ごとに異なる保育活動の効果을上げていく。この緻密に計画されたコンパクトな空間の中央に太くうねった曲がり丸太が床から天井まで昇りつめた大蛇のようにドカンと異彩を放って息づいている。一見デクノボウのように見えるこの大蛇は常にこどもたちを見守り、抱きつくたくましくも温かな遊び相手となってくれる。

やがてこの園を巣立っていくこどもたちのもろもろの楽しい思い出の中に、この大蛇はダイナミックな原風景としていつまでも生き続けるであろう。コンパクトな空間を効率良く活用する機能的な用具構成と対峙させて太い曲がり丸太をこどもたちへの贈り物とした作者の「対立と調和」の技の妙が見事である。

(石井賢俊)

## こども環境学会 活動賞

### <総評>

本部門は子どものための環境づくりにかかわる研究論文の分野並びに子どものための諸施設のデザイン分野以外の、子どものための諸実践や諸活動を広く対象としている。今年度は10の団体、個人からの応募がありました。事前に各団体からの活動の内容とパワー満載の分厚い応募資料の3部を持ち回りで読ませていただき、その後、審査員一同会して審査会議を開き各審査委員から全活動に対する評価コメントと評点を出し合いながら公正かつ慎重に審査しました。

今回の応募の内容は、建築家というキャリアを知ってもらおう活動、通学路安全緑地づくりによる子育て支援、病院における療養環境整備活動やホスピタル・プレイ活動、おもちゃ美術館の運営活動、親子の遊び・保育活動、子どもたち自身の活動の支援など多彩な活動でした。子どもの可能性を広げ、深め、地域づくりにつなげ、大人自身が元気になっていく活動で、NPO法人の取り組み、個人の取り組み、地域での取り組みなど多様な活動形態で、こども環境学会の広がりを示している。

今回、応募された7団体の活動はいずれも受賞に値する活動であったが、活動賞1団体、活動奨励賞4団体を選考した。惜しくも今回選考に漏れた団体、個人、グループは次回以降にも受賞の機会があるので、活動を継続して応募していただきたい。

受賞された団体、活動の選定理由に関しては、各団体への講評を参照していただきたい。

(活動賞選考委員長 小澤紀美子)

## 活動賞

鈴木賢一、岡庭純子、名古屋市立大学学生（名古屋市立大学大学院芸術工学研究科）

### 「病院における子どものための療養環境整備活動」

あいち小児保健医療総合センター、名古屋市立大学病院、名古屋第一赤十字病院小児医療センター、三好町民病院、津島市民病院、ヨナハクリニック、緑の森こどもクリニック等 2000 年より 2009 年まで 17（現在進行中を含めると 20 ヶ所以上）の病院にて、主に壁画、内装環境を中心に、入院する子どもたちの観点から不安感を取り除き、温かい療養環境の創出に、大学の研究室あげて取り組んできた成果である。また大学らしくしっかりとその効果についても研究対象として確かめている。そしてこの一連の成果を 2009 年にはビジュアルにわかりやすく、またメディアの紹介事例や発表論文リストまで含めて記録にまとめ、さらに映像 DVD にまでまとめている。

その内の一例では子どもたち参画でデザインをした過程の子どもたちの絵も使いながら『まほうのテント』という絵本にまで作成している。小児医療環境の改善に子どもたち参画でこんなにも夢が広がる、「やればできるのだ」という自信と喜びを治療中の子どもたちに与えるこのプロセスは小児医療環境改善の新しい境地を見せている。

以上のような継続的な取り組みと成果は驚きであるし、感動的でもある。大学の研究室ならではのパワーを見せている。これは代表の鈴木氏のみならず、作業を行った歴代の学生達や協力専門家及び病院の関係者、そして参加した子どもたちに授与されるべき業績であろうが、その一連の活動をリードしてきた氏の持続した熱意というものにも脱帽される。

この活動は大学ならではの点もあるが、多くの小児医療環境の改善への動機づけや参照事例として普遍的な意義もみられる。

以上のことより、本学会活動賞にふさわしいものとして推薦する。

（木下勇）

## 活動奨励賞

佐藤哲信（日本公開庭園機構）

### 「市民による通学路安全緑地づくり活動」

通学路の環境改善にオープンガーデンの発想で安全緑地をつくっていかうという一連の活動である。見通しの悪い交差点角の敷地をカットして公開緑地とすることで、見通しがよくなり交差点が安全になる。通学路沿いの接道部分をオープンに居住者が草花の世話する緑地にとすることで安全で快適で子どもたちと地域の人との会話が弾む安全な道になる、という発想は、当学会がとりまとめた「子どもの遊びと安全・安心が両立するコミュニティづくりガイドライン」にも通じる考えである。そういう面でたいへん期待される活動である。

ただまだ通学路・安全緑地の実績は今のところ学校敷地や公園等公共用地上でしかみられない。いかに民間敷地もこの構想に協力してもらうようにするか、それができてはじめて通学路安全緑地という構想も生きてくるであろう。そこまで展開しているならば活動賞に値すると思われるが、今後その課題にチャレンジされることを期待して奨励賞を授与したいと考える。

（木下勇）

## 活動奨励賞

松平千佳（静岡県立大学短期大学部）

### 「小児医療におけるホスピタル・プレイ活動について」

すべてのこどもに暖かい風を送ることが、今、我が国が真っ先にしなくてはならないことである。子ども・子育て新システムの議論は、その大前提を常に基本においてなされるべきであるが果たしてどうだろうか。そのような中、静岡県立大学短期大学部が行っている HPS（Hospital Play



Specialist 養成教育事業は、まさに入院する子どもたちに暖かな風を送るものとして注目したい。子どもをどんな時も「遊び」から遠ざけてはならない。なぜなら、子どもは遊びを通して学び、育ち、人とつながっていくからである。遊ぶなかで見せる笑顔は大人を癒し、何より笑うことはお互いの自然治癒力を高めることにもなるだろう。

病院内におけるこども環境をよりよいものにしていくため、この養成講座に大きな期待を寄せたい。医療従事者はもちろん入院した子どもの幸せを願っているだろう。そこに、HPS が加わることで一層の暖かい風が送られることになるだろう。本人や家族はもちろんのこと、病院に勤める大人たちすべてに春風をもたらす可能性を感じたのは私だけだろうか？

(木村歩美)

## 活動奨励賞

### 三輪律江 (ミニシティプラス)

#### 「こどもたちがまちを創る～ミニヨコハマシティの活動」

横浜市都筑区の生涯学習課で開催された講座の受講生によって、行政とは異なる立場で“まちづくり”をすすめる目的で「NPO 法人 Love つづき」の活動の一環として、ミニヨコハマシティ研究会は誕生した。2007 年から開始された研究会の活動は学習の中で知った“こどものまち”の実践を自分たちの地域で開催したいと活動に取り組み、その年の3月17日・18日には第1回の「ミニヨコハマシティ」を実施した。それ以降「NPO 法人 ミニヨコハマシティ・プラス」として本年まで活動をすすめる中では、横浜開港150周年イベントで大棧橋ホールを会場に「第2回こどものまち世界大会 in ヨコハマ」を開催するなど、社会的にも“こども参画”をすすめる目覚ましい活動を展開している。特に他のこどものまちの実践と比較して、行政との協働による“こども参画”のモデルとしても見るべきものがある。

(神谷明宏)

## 活動奨励賞

### 米倉雅真 (こども未来フォーラム)

#### 「子ども未来フォーラム：子どもの遊び環境をつくる活動」

1997年に仙台市が開始した「子ども未来フォーラム」は、教育機関、団体、市民などが実行委員会を組織し、児童館も加わって事業の企画～実施～まとめを行うもので、さまざまな年齢層のこどもと、関わる大人に向けて多様なプログラムを行ったが、高校生自主事業も組み込まれるなど、市民・こどもの参画事業としても本格的な取り組みである。2002年に市は費用負担を終了した後も、「子ども未来フォーラム」に参集した関係者により幼稚園を会場に軽費で継続されている『こどものまち』には、長年にわたり築かれたネットワークと経験が生かされている。

長年にわたり市民参加型で進めてきた中で、運営者と、協力者、参加者が育ち合う形が生み出されており、参加した小学生はやがて中学生の『Jr. ボランティアアーノ』、高校生以上の『ボランティアアーノ』となって100名を超すボランティアを形作っている。「子ども未来フォーラム」は、長年の事業実績を活かして、仙台市におけるこどもにやさしい地域文化のさらなる向上に貢献しており、活動奨励賞にふさわしいものである。

(宮本照嗣)